

## 天声人語

明治の初め、日本にまだ交番がなかつた時代である。巡回したちはまちの角々に交代でたたずんで「立番」をしていた。雨や雪、夏の夕立や雷に悩まされたと、篠田鉱造著『明治百話』に代、交番は駐在所とあわせ1万2千力所を上回る。「何かあつたら交番に駆け込んで」と子どもに教えている方もあるだろう。そんな安全の象徴が、惨事の場となつた。おとといの富山市の事件である▼映像を見ると、どこにでもあるような住宅街の交番である。住む人に安心感を与えてきたに違いない。数十カ所を刺され、亡くなつた警察官の無念と思う。奪われた拳銃が、さらに一人の警備員の命を絶つてしまつた▼容疑者は拳銃や刃物を手に住宅街を歩き回つた後、小学校へ向かつたようだ。子どもたちが巻き込まれなかつたのが、せめてもの救いだ。当時は授業中で約400人の児童が体育館に避難したという。もし下校の時間と重なつていたら、どうなつっていたか▼拳銃が奪われる事件はまれなことではなく、数年に1度ほど発生している。「銃の取り出しやすさ」と「強奪されにくさ」はときに矛盾する。悩ましいところではあるが、対策に知恵を絞つてほしい▼日本で生まれ育つた交番の制度は、ブラジルやインドネシアなどでお手本にされている。海外でも呼び名がそのまま通用するようになった「KOBAN」。安心のとりでに死角があつてはならない。

2018・6・28